airiti

宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』のヒロイン像

永井 隆之
國立政治大學日本語文學系助理教授

摘　要

宮崎駿作品的女主角大多是性格開朗、勇敢且內心堅強的女性。與迪士尼動畫電影中典型的女主角們相比，對代表「王子殿下」的男性角色的依存度較低，被描寫為獨立的存在。特別是在以女主角的成長過程為題材的作品之中，也有由女主角拯救戀愛對象的男主角，即把女主角作為女英雄來描寫的作品。本研究所關注的作品為『魔女宅急便』(1989 年公開)。這部作品被指出是宮崎氏正式地創造出具有寫實的「少女成長物語」以及「女性救助男性」這兩點，至今鮮見的女主角像，因此成為劃時代的作品。

本研究中，將焦點集中在『魔女宅急便』描繪的「少女成長物語」裡，女主角的挫折與克服(飛行魔法的喪失與回復)的場景，並針對在宮崎駿作品之中以女英雄作品為起始的本作裡女主角的獨立性質進行討論。

關鍵字：宮崎駿、魔女宅急便、動畫、女主角、女性

要　旨

宮崎作品のヒロインは性格が明るく、健気で芯の強い女子が多い。ディズニー映画の典型的なヒロインたちに比べると、「王子様」に代表される男性キャラクターへの依存度が低く、自立した存在として描かれているという。特に、ヒロインの成長過程が題材となる作品では、恋愛対象となるヒーローを救済するヒロイン、いわばガールヒーローとして描かれているものもある。

本研究が注目するのは、『魔女の宅急便』(1989 年公開)である。この作品は宮崎氏が本格的にリアルな「女子の成長の物語」と「女子が男子を助ける」というこれまでにあまり例をみないヒロイン像を創りあげたという点で、画期的な作品であったことが指摘されている。

本研究では、この『魔女の宅急便』における「女子の成長の物語」の中で、特にヒロインの挫折とその克服(空飛ぶ魔法の喪失とその回復)のシーンに

airiti

焦点を絞り、宮崎作品のガールヒーロー物語の出発点となった本作品におけるヒロインの自立の質について検討する。

キーワード：宮崎駿、魔女の宅急便、アニメ、ヒロイン、女性

Abstract

Most of heroines are cheerful, brave, and strong-minded in animations directed by Hayao Miyazaki. Compare with the typical heroines of animated films produced by Walt Disney Pictures, they are self-reliant and less dependence on “prince”. It is also especially that describe the scene of heroine gives relief to hero in productions on the theme of heroine’s growth, that is to say, it portrays heroine as a girl hero.

The research takes note of “Kiki’s Delivery Service” (release in 1989). It is pointed out the production is revolutionary because it doesn’t have been saw that serious realistic “girl’s coming of age story” and “female give relief to male” of the heroine who composed by Miyazaki.

The research focuses on the scene of frustration which heroine is confronted and overcome it (the loss and recovery of fling ability) in “girl’s coming of age story” of “Kiki’s Delivery Service”, and considers the self-reliance quality that heroine has in the production which is the first time composed a girl hero story by Hayao Miyazaki.

Keyword : Hayao Miyazaki, “Kiki’s Delivery Service”, animation, heroine, female

airiti

宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』のヒロイン像

永井 隆之

一　はじめに

近年、アニメに代表される日本のポップカルチャーに関する研究はますます盛んとなっている。その中でもジェンダーの視点を取り入れたヒロイン像に関する研究は、社会学や文学などの方面から既に貴重な成果が積み上げられており、アニメ研究などの一ジャンルとして定着している感がある〔村瀬・須川 2013〕[1]。

アニメ研究において、検討対象としてよく好んで用いられているのが宮崎駿監督の作品群である。枚挙にいとまがないほどに研究論文や著作が発表されている(例えば〔叶 2006、切通 2008、杉田 2014、村瀬 2015〕など[2])。日本の数あるアニメ作品の内、「国民的作家」〔酒井 2008〕[3]と形容される宮崎氏の作品は世界的に注目度も高く、日本のみならず多くのファンがいることで知られる。作品の詳細を語らずともそのストーリーの魅力が既に認知されている稀有な対象であるとも言える。

宮崎作品のヒロインは性格が明るく、健気で芯の強い女子が多い。ディズニー映画の典型的なヒロインたちに比べると、「王子様」に代表される男性キャラクターへの依存度が低く、自立した存在として描かれているという〔おかだ 1997、山田 2013〕[4]。特に、ヒロインの成長過程が題材となる作品では、恋愛対象となるヒーローを救済するヒロイン、いわばガールヒーローとして描かれているものもある。

本研究が注目するのは、『魔女の宅急便』（1989 年公開）[5]である。この作

[1]村瀬ひろみ・須川亜紀子「ジェンダー論 アニメから読み解くジェンダー」(小山昌宏・須川亜紀子編『アニメ学入門』現代書館、2013 年、P76-95)。
[2]叶精二『宮崎駿全書』フィルムアート社、2006 年、切通理作『増補決定版宮崎駿の世界』筑摩書房、2008 年、杉田俊介『宮崎駿論』NHK 出版、2014 年、村瀬学『宮崎駿再考』平凡社、2015 年。
[3]酒井信『最後の国民作家 宮崎駿』文藝春秋、2008 年。
[4]おかだえみこ「宮崎アニメヒロインの系譜」(『臨時増刊　宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブ キネマ旬報』1233 号、株式会社キネマ旬報社、1997 年、P45-49)、山田結樹「宮崎駿のヒロイン像―長編アニメーションをめぐって―」(神戸学院大学人文学会『人間文化』32 号、2013 年、P81-89)。
[5]本研究で使用した『魔女の宅急便』の動画データは、DVD『ジブリがいっぱい

品は宮崎氏が本格的にリアルな「女子の成長の物語」と「女子が男子を助ける」というこれまでにあまり例をみないヒロイン像を創りあげたという点で、画期的な作品であったことが指摘されている〔大塚 2013〕[6]。

本研究では、この『魔女の宅急便』における「女子の成長の物語」の中で、特にヒロインの挫折とその克服（空飛ぶ魔法の喪失とその回復）のシーンに焦点を絞り、宮崎作品のガールヒーロー物語の出発点となった本作品におけるヒロインの自立の質について検討する。なお、今回の研究対象に、宮崎駿監督作品の原作で同名タイトルの角野栄子氏の児童文学作品は含まれていない。

二　物語のあらすじ

魔女の血を受けつぐキキは、十三歳の女の子である。魔女が一人前になるには十三歳の満月の夜に魔女のいない町で修行をしなければならないというしきたりがあった。そこで、キキはある満月の夜、黒のドレスに身を包み、彼女とのみおしゃべりができるオスの黒猫ジジとともに箒に跨り、理想の街を求めて旅に出る。そして、コリコという海の見える賑やかな街を気に入り、修行の地に定める。

当初、キキはコリコの都会の喧騒に馴染めず、行き場もなく心細い時を過ごす。だが、空飛ぶ魔法を使ったある人助けをきっかけに、パン屋「グーチョキパン店」のおかみさん・オソノに気に入られ、彼女の好意で二階の空き部屋に住むことを許される。そして、空飛ぶ魔法を使っての宅配業「魔女の宅急便」を始める。キキは宅配の仕事を通じて、森の中の小屋で一人絵を描く五歳年上のウルスラなど、老若各世代の様々な人生を歩む女性たちと交流を重ねながら、収入を得て自活すること、働くことの達成感と苦労を経験していく。

ある日、キキのもとにトンボという少年が彼の属するクラブのパーティーの招待状を渡しに来る。彼は空を飛べるキキに憧れ、初対面の時から人懐こく接してくる少年であった。当初キキは彼を軟派な「不良」だと思い避けていたが、今回の招待にはうれしい気持ちを抑えきれず、行くことを決める。

COLLEECTION 魔女の宅急便 宮崎駿監督作品』ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2001 年版。

[6]大塚英志「『魔女の宅急便』解題」(スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋、2013 年、P287-308)。

airiti

だが、その日はあいにく二件も仕事が入っていた。一件目をなんとかこなしたキキは、2 件目の荷物受取先のある老夫人の家に向かう。二件目の仕事はこの老婦人から「ニシンのパイ」を受け取り、誕生パーティーを開く孫娘のところに届けるというものであった。だが、家に着いてみると、老婦人はまだパイを完成させていなかった。さらにキッチンのオーブンが故障していることがわかり、キキの提案で長らく使用していない竈に火を起こしてパイを作ることになる。

パーティーに行く時刻が迫る中、ようやく完成したパイを運ぶが、その途中雨に降られ、ずぶ濡れになりながら孫娘の家に到着する。だが、色鮮やかなドレスを着た孫娘がドアを開けて出てくると、彼女にそのパイを迷惑そうに受け取られ、冷たくあしらわれてしまう。キキは元気がなくなり、帰宅時にトンボの姿を見かけるものの声も掛けず、オソノにも「もういいもん、こんななり(姿)じゃ行けないもん」と言い、パーティーに行くことを諦める。そして、翌日、雨に濡れたせいで熱を出し寝込んでしまう。

その後、オソノの看病もあってすっかり元気になったキキは、オソノから「必ず本人に渡してね」と届け物を頼まれる。届け先が近いので歩いて行くと言い、いつものように黒猫のジジを呼ぶ。ジジも「仕事？今行く」と言って屋根から降りようとする。だが、キキはジジがガールフレンドの猫と一緒の様子だったので、遠慮して一人で出かけることとする。

届け先付近の高台から海を眺めていると、トンボに声を掛けられキキは驚く。なんと今回の届け先はトンボの自宅だったのだ。彼と話すきっかけを作ってくれたオソノの気持ちに気づきながらも、トンボに先日のお詫びを兼ねた挨拶をするキキ。

その後、トンボの提案で彼が作った人力飛行機の動力部(プロペラ付自転車)の走行訓練を兼ねて、海辺に不時着した飛行船を見に行くことになる。その途中、二人は急カーブを曲がるために体を大きく傾けたり、そのカーブから急に現れた車を避けるために長らく宙に浮いたりしながら、ついには崖から落ちるようにして海辺に到着する。起き上がったキキとトンボはお互いの汚れた顔を見て笑い合い、すっかり打ち解ける。そして飛行船を眺めながら、二人は穏やかに話し始める。

しかし、二人だけの楽しい時間もここまで。トンボの女友達たちを乗せたオープンカーがラジオの音を響かせて通りかかる。彼女たちから「すっごい

airiti

ニュースよ、早く」と呼ばれたトンボは、「ちょっとまっててね」とキキに言ってすぐに彼女たちのもとへ駆け寄ってしまう。

トンボたちの様子を見て、しだいに厳しい表情になっていくキキ。飛行船の中を皆と一緒に見に行こうと誘われても頑なに断り、トンボに「何怒ってるの」と聞かれても「仕事があるの、ついてこないで」と冷たく言い、その場を去る。

徒歩で部屋までようやくたどり着き、父からもらったラジオをつけてもつまらなく聴こえ、傍まで来たジジに「私ってどうかしてる？せっかく友達ができたのに急に憎らしくなっちゃう。素直で明るいキキはどこかへ行っちゃったみたい」と話しかけても、ジジはニャーと鳴くばかりで、どこかへ行ってしまう。

しばらくしても何も話さず素っ気ないままのジジの様子を見て、自らの異変を感じ、箒にまたがっても飛べないことから、自分の空飛ぶ魔法が失われていることに気づく。そして、丘から駆け下りて何度も飛ぼうと試みるうちに大きく転び、母からもらった箒を折ってしまう。飛行船が再び空に浮かんでもやや厳しい表情で眺め、それに乗って手を振ったというトンボから興奮気味に電話がかかってきても、小声で「もう電話しないで」と受話器を一方的に置く。そしてオソノから顔色が真青だと指摘されると「私修行中の身なんです。魔法がなくなったら、私、何の取柄もなくなっちゃう」と悲嘆するのであった。

そんな時、ウルスラがやって来る。そして、二人でウルスラが夏のあいだ絵を描くために使っている森の小屋に行く。そこでキキは彼女に悩みを打ち明け、話し合うことで、少しずつ元気を取り戻していく。ウルスラと別れた後、キキは老婦人に呼ばれ、先日のお礼にケーキを焼いてもらい、これに感動する。

その直後、テレビのニュースで、海辺に停泊していた飛行船が風にあおられ、見学に来ていたトンボを宙吊りにし、市街の上空で制御不能となった様子が実況される。キキは彼を助けようと、無我夢中で現場に向かう。そして町の多くの人々が見守る中、掃除夫のデッキブラシを借り受け、魔法の力を奮い起こし、なんとかトンボを救うことに成功する。

こうして、再び空飛ぶ魔法を取り戻したキキは、街の人々にも受け入れられ、トンボやその仲間たちと楽しい時を過ごしながら、今日も元気に宅配業

に精を出すのであった。「時々落ち込むこともあるけれど、私、この町が好きです」との両親に宛てた手紙から、彼女の成長を読み取ることができる。

三　これまでの評価

『魔女の宅急便』においてヒロイン・キキが空飛ぶ魔法を喪失し、再びこれを回復する原因について、これまでどのような指摘がなされてきたのか。以下、評者たちの見解を示し、その成果と課題について論じておきたい。

(一)宮崎駿「この作品では、一人の人間のいろいろな顔を見せたかった」〔宮崎 1989〕[7]

宮崎氏によると、本作は思春期という自分を持て余す時期の物語であり、その時期の挫折に特定の原因などなく、そこで人は何度も落ち込んでまた元気になるものであるという。

したがって氏にとって本作ヒロインの空飛ぶ魔法喪失と回復は思春期特有の気分の揺らぎによるものとされる。氏はこの事象の原因をキキの主観的印象からのみ説明することで、作品に深みを持たせようとしているのかもしれない。だが、このことによって、本作に対する、様々な解釈が生まれることとなった。

(二)石原郁子「『魔女の宅急便』ここからあそこへのあいだの少女」〔石原 1997〕[8]

石原氏の評論は『魔女の宅急便』に関するおそらく最初期の本格的な論考である。氏はまず本作や他の宮崎作品に、宮崎氏らに特有の女性崇拝が見られることを指摘する。それは、理想的な女性を巫女・魔女の如く「始原からの智恵を受け継ぐ」「同じ〈女性〉の連続体」の一つとして「遥か彼方からの智恵や力を、その先頭から最後尾へと絶えず送り続けている」存在として過剰に崇め、地球的な環境の危機を救う呪力を持つ者とさえ見なして過剰に期待する」ものであるという。ただ、本作においては、等身大の女性にとって負担となるこの女性崇拝の「いやらしさ」が、原作にはない演出によって

[7]宮崎駿「この作品では、一人の人間のいろいろな顔を見せたかった」(『ロマンアルバム・エクストラ 70 魔女の宅急便』徳間書店、1989 年、P110-112)。
[8]石原郁子「『魔女の宅急便』ここからあそこへのあいだの少女」(『総特集 宮崎駿の世界 ユリイカ 8 月臨時増刊号』393 号、青土社、1997 年、P193-199)。

airiti

免れているという。その一つは「仕事に対する現金の謝礼」であり、これでキキが「真面目で、礼儀正しく、責任感が強い」人物として「近代以降の都市に於ける、互いに見知らぬ人間同士」の中で「人間関係」を「努力して築き上げて」いく様子が描かれているとする。もう一つは「飛べなくなる時期を持たせること」であり、これでキキが「魔女の血を先天的に受け継いでいるのではなく、意識的に自分の内に育て、獲得するもの」になったとする。三点目は「十八歳のウルスラという女性の設定」であり、映画には意図的にキキという一人の人物が成長した姿として各年代の女性が配置されているが、ウルスラは「少し成長したキキ」であり、キキの挫折を経験した者と設定されており、「彼女は、一方では、個体を越えて一つに繋がり合う総体としての女たちのはるかな歴史の中で、キキと重なるのだが、また一方では、個体としての意識のめざめの先輩として、キキを元気よく導」いているとする。石原氏は『魔女の宅急便』にこれらの演出を通して、女性たちの理想と現実の狭間に揺れる葛藤と努力が描かれていることで、「いやらしくもナイーブな古代だの自然だのへの賛美には終わらない、現代の都市の片隅の女性たちへのエール」になり得ていると評価する。

キキが空飛ぶ魔法を喪失した原因については、「キキがトンボに好意をもつのと前後して魔力が弱る」ことを指摘しつつも、「それとはまったく別に、キキを混乱させ、自分の内部でコントロールできないと感じさせる何かがある」とし、「〈自分はほんとうに飛びたいのか〉〈自分の飛ぶ力は社会で立つためにどれほどのものなのか〉といった、いわば自分自身の内へ深く降りていったときの疑問が、彼女を迷わせ、方向を見失わせ、自信を失わせ」たとし、「自意識のめざめ」に飛べなくなる「原因」を求めている。そして、魔法の回復も同じく「自意識の目覚め」に問題を「克服する強さ」を求めている。

石原氏はトンボへの好意によってキキが魔法を喪失したことを指摘しながらも、キキの自意識の目覚めが魔法喪失の真の原因であると述べている。だが、それが具体的に何なのか本作に即して説明していない。空飛ぶ魔法の喪失と回復の直前のシーンにトンボが登場しているのであるから、まずはこのことの意味を問うべきではなかったか。

(三)スーザン・J・ネイピア「現実ばなれした存在の魅力」〔ネイピア 2002〕[9]

ネイピア氏の功績は『魔女の宅急便』の持つヒロインの自主性・自立性について本格的に英語圏に発信したことにあろう。氏はこの作品を「おとぎ話に陥らず」、「女性らしい可愛さを保ったまま、男性らしい社会的成功を目指す物語」であり、キキが男の子から救われる「乙女」ではなく、逆に男の子を救う主体として「本物の自立」を果たす存在として描かれている点を評価している。

キキが空飛ぶ魔法を喪失した原因については、自分を信じることができなくなったことによるとし、その後回復できた原因については、他者を救済することで自分だけの悩みから解放され、再び自分を信じることができたことに求めている。ヒロインの自信と他者とのつながりが空飛ぶ魔法の力の伸長に深いかかわりがあるとの指摘は、その後の研究の基本的な方向性を定めたという点で重要である。ただ惜しむらくはかかる指摘が具体的な裏付けのないまま、印象的に述べられている点である。果たしてヒロインの自信喪失がとのような「自分だけの悩み」によって引き起こされたものなのか、そしてその回復がどのような形での「自分だけの悩みからの解放」によるものなのか、「他者」特に救済対象であるトンボとのかかわりから具体的に検証していく必要があろう。

(四)須川亜紀子「ダブル・イメージングによる少女表象―宮崎駿『魔女の宅急便』―」〔須川 2010〕[10]

須川氏は『魔女の宅急便』から、労働と共食の場におけるヒロインと他者、特に各世代を代表する女性たちとのコミュニケーションがヒロインの社会とのかかわりを深め、自立をはかり、自分を信じる力を養うのに重要であったと指摘する。

ヒロインが空飛ぶ魔法を喪失した原因については、労働をせず恋愛や娯楽に興じる同年代のおしゃれな女性たちを見て、理解不能の劣等感に陥ったことに求め、再び魔法を回復させることができたのは、先のコミュニケーションの内、特に自身の分身のようなウルスラとのそれを図ること(ダブル・イ

[9]スーザン・J・ネイピア「現実ばなれした存在の魅力」(『現代日本のアニメ』中央公論社、2002 年、P225-254)。
[10]須川亜紀子「ダブル・イメージングによる少女表象―宮崎駿『魔女の宅急便』―」(白百合女子大学言語・文学研究『映画と文学』弘学社、2010 年、P37-50)。

airiti

メージング)で互いに「自分を信じる力の重要性を理解したこと」が基礎になっているという。

氏の述べるキキと各世代の女性たちとのコミュニケーションについては既に石原氏に類似の指摘〔石原 1997〕がある。須川氏の述べるように、それがキキにとって社会的自立を促す効果があるという理屈は一般論として理解できる。だが、一方で理解に苦しむのは、なぜ劣等感があると魔法がなくなるのか、という点である。劣等感は努力を促す原動力にもなるものではないか。

また、ヒロインの魔法の回復に、ウルスラとの話し合いが何らかの影響を与えているという点についても、既に石原氏が類似の指摘をしている〔石原 1997〕。だが、繰り返しになるが、本作にそれらの因果関係が明示されているわけではない。魔法回復の直接の契機は、トンボの救出にあるのであるから、まずトンボとのかかわりからその原因を探るべきではないか。

(五)上野千鶴子氏「なぜキキは 13 歳なのか」〔上野 2013〕[11]

上野氏は『魔女の宅急便』を「少女から女への性的な変容のドラマ」であるとした上で、キキが飛べなくなったのは、異性(トンボ)を意識し、女としての「性に目覚めた」ことを象徴していると論じる。そして、空飛ぶ魔法を回復することについては、窮地に陥った少年を救いたいと念じるキキの「少年への愛」の強さによるものと読み取っている。ただし、上野氏はこの物語の結末に不満がある。氏によると、本来ならば少女が女に変容すると、少女時代の遺物である空飛ぶ魔法を完全に失うはずであり、宮崎氏はヒロインに自立を図らせるために「学問と技術」を身につけさせるべきで、それが描けなかったということが、女の成長物語を描くことに失敗した宮崎氏の限界を示しているという。

上野氏の指摘するヒロインの少年に対する愛と魔法との関係は重要であると思われる。少年への愛の強さがなぜ魔法喪失とその回復に深く関わるのか、そのことを宮崎氏の失敗として退けず、作品自体のもつ物語の要請という観点から考えてみる必要がある。

[11]上野千鶴子「なぜキキは 13 歳なのか」(スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋、2013 年、P105-118)。

airiti

(六)内田樹氏「空を飛ぶ少女について」〔内田 2013〕[12]

内田氏によると、『魔女の宅急便』は「天才が陥るピットフォール」(落とし穴)をどう克服するかという物語であるという。

キキの飛ぶ力は「天賦の才」であり、「思春期以前の未熟な時代」には自分のためだけに「無意識に」飛べたが、「街の人々との出会いを通じて」「社会的成熟」が進むと「恐怖、不安、そして嫉妬によって損なわれ」、「逆に、晴れやかな気分のときに活性化し、「誰かのために働く」ときにさらに順調に作動し、「誰かを救おうとする」ときに最大化する」ものとなり、「主体と他者との関係」において決定されることになったという。

そこで氏は、キキが「意識的にもとうとう飛べなくなる原因」として「飛行船」に対する「嫉妬」をあげ、その背景に、自分の「飛ぶ力」が他者から「格付け」され、「役に立たないものと見られることからくる恐れ」があると指摘する。そして、「トンボを救出する際に、キキの飛ぶ力が回復できたのは」、この時、キキが「自分の才能」が誰によっても代替できない「かけがえのないもの」であること、つまり、「単なる換金可能な技術として市場で売り買いするうちに、匿名の売り手と買い手の間でゆきかう商品」ではなく、「固有の名前と固有の顔をもった人たちと、互いに支援し、支援され、頼り、頼られ、迷惑をかけ、迷惑をかけられるという相互的なネットワークの中で用いられる」ものとして、自覚できるようになったからであったと説く。

このように内田氏は、『魔女の宅急便』から、人が何らかの才能を育てるためには、換金可能な市場における匿名の評価ではなく、相互扶助的なネットワークに身を置くこと(あるいは意識すること)が肝要であるとのメッセージを読み取っている。それは宮崎氏の意図した「思春期の揺らぎ」を引き起こす環境というべきものを示そうとする試みであったといえる。

人の顔が見えるような相互的依存的なネットワークによってヒロインが自信を持ち、魔法の力が維持されるという趣旨は、各世代の女性たちとのコミュニケーションによってヒロインが社会的に成長を遂げるとする須川氏らの議論と通じるところがあるが〔須川 2010〕、メンバーシップの規模が男性も含め拡大しているところが特徴といえる。内田氏はこのような限られた

[12]内田樹「空を飛ぶ少女について」(スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋、2013 年、P8-32)。

メンバーシップにおける信頼関係にこそ人が人らしく生きられる場があると主張し、これに高い価値を見出しているようである。しかし、このような考え方に対しては、狭い共同体の価値観こそがそこに属する者の生き方や価値を限定し、差別を生み出すのではないかとの批判が出されるかもしれない。そもそも資本主義的な自由市場の広がりが人々を身分差別から解放する反面、誰とも繋がれない孤独を生み出していくことはつとに指摘されていることである。石原氏が「近代以降の都市における互いに見知らぬ人間同士」の中で、労働の対価として現金を得るなどして、「人間関係」を「努力して築き上げ」ていくキキを、都会の孤独の中で市場社会を通じて逞しく生きる若者の姿に重ね、高く評価する〔石原 1997〕のも、自由の代価としての孤独から逃げることのなく夢を追求するキキに共感してのことであろう。これに対し内田氏の主張は、このようなキキの姿勢を消極的に評価し、キキに理想郷のような逃げ場を与えているような印象を与える。そのような場所にはキキの故郷がある。わざわざ賑やかな都会に住もうとしたキキに用意する必要はないのではないか。

また内田氏の説にはこの他にも、「嫉妬」の対象が飛行船であるとし、これによって空飛ぶ魔法を喪失するという考え方が示されているが、果たして本当に作品を鑑賞した誰もがそのように解釈できるかどうかにも疑問が残る。

(七)大塚英志「『魔女の宅急便』解題」〔大塚 2013〕[13]

大塚氏は、宮崎氏の作品が、通過儀礼を反映した昔話などの持つ典型的な物語構造(「姥皮」「ライナスの毛布」）を利用しつつも、『魔女の宅急便』では主人公の「内面」を含めて、丹念な成長の物語を作っていると評価する。具体的には、キキが「大人になる試練」として、家の竈の火を扱うことで「主婦」や「大人になった女性」たちから仲間としての承認を受け、また「初潮の暗喩」である風邪を引くことで身体的にも成長した点をあげている。

以上を踏まえ、大塚氏は、キキが一旦魔法を使えなくなる原因を、彼女が大人として成長した結果であり、「姥皮」「ライナスの毛布」のように親から無自覚に受け継いだ魔法が必要ではなくなったことに求めている。一方、キ

[13]大塚英志「『魔女の宅急便』解題」(スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋、2013 年、P287-308)。

airiti

キが飛ぶ魔力を回復させたのは、彼女がトンボと人力飛行機の動力部＝プロペラ付の自転車に乗った際に、「風を制御し、空を飛ぶこと」を自覚的に学び、さらに「もう一人のキキであり、半歩先に大人になったキキ」であるウルスラから「内的な葛藤」を聞き、「内面の成長」を促され、大人としての「成熟」が一程度進み、改めて魔法を意識的に自己のものにしたからであると述べる。また物語のクライマックスである「男の子(恋人)」の救済劇は姥皮の最後の試練に相当するものであり、ヒロインの通過儀礼の成功を証明するものと評価している。

大塚氏の議論は、民俗学の通過儀礼を軸とする物語構造論を基礎に、石原氏や須川氏の各世代の女性たちとのコミュニケーションや「ダブル・イメージング」、内田氏の「相互依存的ネットワーク」、上野氏の「女性の成長物語」などの視点〔石原 1997、須川 2010、内田 2013、上野 2013〕を思わせる諸要素を組み入れて、宮崎氏の作品を評価するものであり、論理的にはこれまでの諸説を合わせたような主張となっている。

ただし、氏の議論において重点が置かれているのは、石原氏や須川氏や内田氏同様、ヒロインの空飛ぶ魔法の喪失や回復を、近隣ネットワークの共同体験やウルスラとの友情に基づくヒロインの社会的成長の側面から説明するところにある。一応「男の子(恋人)」との関係についても言及してはいるが、それはあくまで物語構造論の軸となる通過儀礼的要素を作品に適応させるために必要とした程度の形式的な利用と言える。本研究で繰り返し述べてきたように、本作を観察する限り、特にキキの魔力の回復にはトンボの救済という契機が描かれているのであるから、彼との関係を重視し、これを中心に組み込んで議論を組み立てる必要があるのではないか。

また他に大塚氏の主張には、氏の物語構造論に沿った形で作品を観察したためか、個々のシーンの解釈にやや強引なところが目立ち、あらためて検討しなければならない箇所が少なからず見受けられる。例えば、ヒロインの風邪を「初潮の暗喩」であるとしたり、ヒロインが「風を制御し、空を飛ぶこと」を自覚的に学んだとしたりする点など、作品を受容しただけでは解釈が分かれるようなところを立論の証拠として採用してしまっている。やはり、誰が観察しても同じ結果となるような解釈を基礎に議論を積み重ねていくべきだろう。

airiti

(八)須川亜紀子「宮崎駿の『魔女の宅急便』をめぐる旅―児童文学、アニメ、実写映画、そして『聖地巡礼』―」〔須川 2014〕[14]

前稿〔須川 2010〕から四年後、須川氏は再び『魔女の宅急便』を題材とした論文を発表する。この論文では、「魔法、少女という意匠を使った「自分探し」に焦点を当て、『魔女の宅急便』が求引するものを探るため、物語のテクスト分析と「聖地巡礼」というコンテンツツーリズムの分析」を行うという二部構成がとられている。

本研究が注目するのは「物語のテクスト分析」の方である。キキの空飛ぶ魔法喪失の原因については、同年代の着飾った女性たちに対する「劣等感」「虚無感」をあげるだけでなく、新たにトンボという「「異性との恋愛」へのステージ」に入り、同世代の少女を通じて「フェミニティ」に直面」したことによって「劣等感」「虚無感」を惹起させたとし、これが「魔力を喪失するくらいの衝撃であった」と指摘している。

また、魔法回復の原因についても、トンボ救出の際にキキが「自分を信じて集中した結果」だとしながらも、その自信を回復することができた理由を、前稿にはない新たな二つの論点から説明している。一つは、森の山小屋でのウルスラとの対話の後、街に戻って「トンボと仲直り」したことを取り上げ、これを「労働が報われず、パーティーの時間に遅刻して帰宅したキキが…雨に濡れた自分の黒いドレスと自分を否定させた」「恋愛対象」である「異性の他者」トンボから「承認」されたと解釈し、これが「女性の自己肯定の重要なファクター」として働き、「「恋愛」を通じてキキは女性としての成長の一歩を踏み出」せることができたと説いている点である。そしてもう一つは、キキが老女に手作りケーキをプレゼントされたことを取り上げ、これによって「キキの劣等感を抱かせた少女の肉親が、その劣等感を回復させ」、「金銭報酬以上の利益をもたらした」とする点である。そして、このような異性からの承認による自己肯定と同年代の同性に対する劣等感の克服によって、キキは自信を回復し、自らを信じて飛ぶことができたという。氏はこれらを踏まえて、「『魔女の宅急便』における魔法は、少女が自律性を獲得する過程で現れる、自己肯定や自信を表象している」と結んでいる。

[14]須川亜紀子「宮崎駿の『魔女の宅急便』をめぐる旅―児童文学、アニメ、実写映画、そして『聖地巡礼』―」(studio zero『宮崎駿の臨界点 サブカル・ポップマガジン まぐま 創刊 15 周年記念号』19 号、蒼天社、2014 年、P17-23)。

airiti

一方、前稿で指摘されていた共同飲食・労働を通じた各世代の女性たちとのコミュニケーションやウルスラとの「ダブル・イメージング」による「自分を信じる力」が魔法の回復に繋がったとする主張は、やや後景に退いた感がある。そのことは、ウルスラとの対話によってキキが「少し冷静に自分を見つめるすべを見つける」と評価しながらも、「しかし、ただちに魔力が回復し、(中略)さっそうと箒で空路を滑空…というわけではない」と指摘するところや、先述したキキが老女に手作りケーキをプレゼントされたことについて、女性たちとのコミュニケーションからキキが自信を回復したと解釈せず、キキが孫娘への劣等感をその老女に感謝されることで回復したと捉えていることから窺える。

須川氏のようにキキのトンボとの関わり・恋愛感情からこれらの原因について検討することは、本作にてキキが魔法を喪失・回復する場面の直前に、彼女が好意を抱く異性・トンボとの関係が描かれている点で、正鵠を射ているといえる。かかる視点は既に上野氏にも見られたが〔上野 2013〕、須川氏の卓見は、このキキの恋愛感情によるキキの同性に対する「劣等感」の惹起と絡めてフェミニティの問題として論じた点である。

ただ惜しむらくは、須川氏の議論が物語の誤認から導きだされていると思われる点である。一つは、氏がトンボの作ったプロペラ付自転車に乗って彼と心を通わせてから、トンボからパーティーに招待され、このパーティーの招待を契機に、「キキは「恋愛へのステージに」入った」とする点である。氏はその後、キキが雨でびしょ濡れになりながら、老女の孫娘に冷たくあしらわれ、パーティーに行くのを諦め、風邪を引いて寝込み、魔法が使えなくなったと考えている。だが、映画では、パーティーに行かず、風邪をひいた後、トンボと自転車に乗り、心を通わせた後、キキは魔法が使えないと認識するのである。須川氏の誤認は、魔法を使えなくなった時期を、風邪を引いた直後に求めている点も含め、深刻といわねばならない。なぜ、好意を抱く異性と心を通わせた、つまり他者から承認されたはずのキキがその後魔法を使えなくなるのか、氏の説明ではわからなくなってしまう。

もう一つの誤認は、森の山小屋でウルスラと対話をした後、街に戻ったキキが老女に呼び出され手作りケーキをプレゼントされる前に、トンボと仲直りしたとも述べている点である。だが、映画を見てもトンボの仲直りのシーンは描かれておらず、街に戻ってそのまま老夫人の家へ行き、テレビでトン

ボの危機を知り、クライマックスのトンボ救出のシーンとなる。須川氏はこの「仲直り」から「異性の他者からの承認」を論証しており、これもまた論旨に関わる深刻な誤認と言わねばなるまい。

またさらに論理的な部分でも疑問がないわけではない。例えば、「恋愛対象」である「異性の他者」からの「承認」が「女性の自己肯定の重要なファクター」となるのは一般論として理解できるにしても、それがキキの「女性としての成長の一歩を踏み出した」と評する点には、やや図式的な印象を受ける。「異性の他者」からのあらゆる「承認」が「成長」に繋がるわけではないように思われる。中にはその「成長」を妨げてしまうものもあるのではないだろうか。恋愛対象の者からの承認がキキの「成長」さらには「自律」「自信」に繋がるかどうかは、物語の筋書きや登場人物たちの台詞や行動などを確認した上で丁寧に論証されるべきであろう。この物語では、宅配の仕事を魔法の才能によって行うという設定が作られており、その魔法が「恋愛のステージに入る」ことで「フェミニティ」に直面した結果、喪失したとするなら、当然、仕事と恋愛についても密接な関係を認め、検討すべきだと思われる。須川氏は前稿においても魔法を自信や自己実現の表象と認めるあまり、魔法と仕事との繋がりをあまり重視していない印象を受ける。

そして、氏の今回の論文でどうしても気になるのは、前稿との整合性や継続性が明確に示されていない点である。前稿は注にすら引用されていない。しかし、これまでの評価を個々に検討してみてわかるように、例えば、キキの空飛ぶ魔法の回復の原因についても、各世代の女性たちや近隣のネットワークにおけるコミュニケーションから自信を得たと説明するものと、異性との恋愛関係から説明する二つの系統の解釈があり、これまでは前者が後者を軽視する傾向があり、須川氏もその論者の一人であったはずである。氏の今回の議論は異性との恋愛関係を含めてヒロインの自信を導き出す折衷的なものであるが、それを示すにしても前稿との論旨の整合性や継続性についてもう少し説明があってもよかったのではなかったか。これでは読む者に要らぬ混乱と困惑を与えることになろう。

（九）研究の方向性と展望

ヒロイン・キキが空飛ぶ魔法を喪失した原因とその後回復できたそれについて、これまでの議論は、キキの「自分を信じる心」に焦点をあてつつ、近

airiti

隣の共同体や相互依存的なネットワークでの体験や各世代の女性たちとの交流、女友達との対話に基づく社会的成長を重視するものと、恋愛対象としての異性たる少年への愛情の深まりを重視するものとに分かれていた。本研究では作品観察の結果を踏まえ、前者よりも後者を重視し、ヒロインの自信喪失の内容とそれからの回復を左右する恋愛対象たる異性からの承認、さらにそこに見られる仕事・魔法と恋愛との相関関係からこの問題を検討し、宮崎作品における男子を救済するガールヒーローの自立の質を明らかにしたいと考えている。

四　考察

（一）キキが空飛ぶ魔法を喪失した理由

キキが空飛ぶ魔法を失った理由について考えるには、その契機となる直前の出来事が何かを特定しておく必要があろう。

キキが空飛ぶ魔法を失ったのは、海岸でトンボと別れた後のことで、トンボと会う前ではない。オソノから届け物を頼まれ出かける際にはジジと話せていたし、ジジの態度は素っ気なくはなかった。またトンボとプロペラ付自転車に乗っている時も咄嗟に危機を回避し、かなりの長い間宙に浮くことができていた（この場面は、キキが「風を制御」していた〔大塚 2013〕とはとても思えないほど見ていて緊張する場面である。ただし、宙に浮く前、ハンドルが固定された自転車を、体を傾けることでカーブさせていたので、そのような自転車を制御することを学んだとは言えるが）。だからその前にあったこと、仕事で報われず落胆してパーティーに行く気がなくなり、熱を出し寝込んだことが直接の原因〔大塚 2013〕〔須川 2014〕ではない。よって、キキが空飛ぶ魔法を失う直前の出来事は、キキがトンボと海辺に飛行船を見に行き、途中不機嫌になり、一人で帰っていくエピソードということになる。

それ故、キキが魔法を失ったのは、彼女が不機嫌になったことと大いに関係している。もちろんこの不機嫌は飛行船に対する嫉妬を表している〔内田 2013〕のではない。トンボと海辺で親しく話している時に飛行船を眺めるキキの表情は柔らかでにこやかなものであった。キキがやや厳しい表情で飛行船を眺めるのは魔法を失ってからのことである。この時のキキの表情は自分が飛べなくなった焦りなどを示しているのであって、匿名の人々による市場価値・格付けに身を置いたことで不安になっている気持ちを表している〔内

airiti

田 2013〕のではない。

それでは、この不機嫌は車に同乗していたトンボの女友達たちに対する劣等感を表している〔須川 2010〕のか。確かに彼女たちはキキのように地味な黒い服を着ていない。逆に明るいきれいな服を着て、パーティーや友達たちと遊びに興じている人たちである。また、キキにはこれを羨ましいと感じていることがわかるシーンもある。だがそれでも今回の不機嫌は彼女たちに向けられたものではない。

キキの不機嫌は、女友達たちに呼ばれるがままキキのもとから去って行ってしまったトンボに対する嫉妬からくるものであった。というのは、帰宅後ジジに述べた「せっかく友達ができたのに急に憎らしくなっちゃう」の友達とは彼のことを指すからである。このようなことから、キキの空飛ぶ魔法の喪失はトンボへの恋愛感情に基づく嫉妬と大いに関係しているとみてよいだろう。

しかし、嫉妬するくらい異性を好きになり、女としての性に目覚めた〔上野 2013〕という理由だけで空飛ぶ魔法を失ったと考えるのにも躊躇をおぼえる。ましてやキキが風邪を引いたことを「初潮の暗喩」ととらえ、大人に「身体的にも」女性として成長した〔大塚 2013〕結果とも考えられない。強いてそのような時期を求めるならば、親元を離れ修行に旅立つ 13 歳のある満月の夜までに求める方が相応しいであろう。病床のキキがオソノに何か言いかけて「何でもない」と止めたのは、初潮のことを伝えるのが恥ずかしかったからではない。前後の文脈から推測するに、ここでキキがオソノに言いたかったのは、風邪を引く前の晩に経験したこと、それによって生じた悩み・自信を失ったことについてではなかったか。それはキキが昨晩仕事から戻ってもパーティーに行かず、ずぶ濡れの体と暗い表情のまま部屋に入ったことで、オソノに心配をかけたと思っていたはずであるからである。

本研究では、このキキが自信を失ったことが、彼女の魔法喪失の前提をつくったと考えている。実は、この自信の喪失は単に仕事がうまく行かなかったということだけから生じたものではない。既に指摘があるがここにも異性・トンボが深く関わっている〔須川 2014〕。もしトンボが関わっておらず単なる仕事上の悩みであれば、働く女性同士としてキキはオソノに悩みを打ち明けてもよかったかもしれない。だが、キキはそうしなかった。

それでは、キキが彼からパーティーに誘われるあたりまでさかのぼってみ

airiti

てみよう。キキは、トンボからパーティーに誘われうれしく思っていた。自分を女性として扱ってくれる異性であるトンボに好印象を持ち始め、その彼と一緒に年頃の女の子たちが行くようなパーティーに参加してみたかったのだろう。だが、あいにくとその日は仕事が二件も入り、立て込んでいた。そこでキキがとった方法はパーティーの誘いを断ることでもなく、また仕事をキャンセルすることでもなく、仕事を急いで片づけてパーティーに行くというものであった。

咄嗟のこととはいえ、おそらく彼女は信じたのではないか。仕事という義務を必死に努めればご褒美・権利としての幸せ・好意を抱く異性とのパーティーが待っていると。

その戦略は途中までうまくいっていたが、老婦人の家に到着したあたりから怪しくなってくる。そしてずぶ濡れのままの姿で届け物を渡した孫娘に冷たくあしらわれることで挫折を余儀なくされる。この孫娘はキキとほぼ同年代の女性として描かれており、色鮮やかなドレスを身にまとってパーティー会場から出てきた人物である。このような、キキが仕事を果たした結果、ご褒美として得られると信じていたパーティーの住人からの拒絶は、仕事上の挫折以上のそれを彼女にもたらしたと考えられる。

ここで、彼女は思い知ったであろう。仕事をする自分と遊んでいる他の女性たちとは住む世界が違うのだと。そして、このまま仕事をしていても同年代の女性が経験するような楽しいこと(好意を抱く異性との恋愛やパーティー)なんてないのだと。キキはそう思い込み、自分の仕事とその才能である魔法をどこかで虚しいものと決め、否定してしまいそうになったと思われる。言い換えれば、キキは黒い地味な服を着て仕事をしていてもがんばれば同年代の女性の幸せを得られるという回路を維持することに自信がなくなってしまったのである。コリコの町に来てからずっとキキには同年代の女性に対する劣等感があり、それに抵抗する気持ちもコリコの町に来てから強く持っていたと思われる。だがそれも色鮮やかなドレスを身にまとってパーティー会場から出てきた同年代の孫娘の登場とその冷たい振る舞いによって、キキは自分の考えが強がりに過ぎず、正直に劣等感を自覚することで、仕事と女性の幸せの回路を自ら放棄し、仕事とその才能である空飛ぶ魔法をネガティブに捉えざるを得なくなったと考えられる。それが自信を失うことの具体的に意味するところであった。このシーンの段階では、キキのトンボに対する

airiti

恋愛感情の萌芽は見られるが、それよりもむしろこれを契機として、異性からのパーティーの招待に応じるという彼女の抱く形式的な「女性の幸せ」像が強く浮上し、同年代女性に対する思いが露呈したものとみてよいだろう。須川氏の説く、キキが「「異性との恋愛」へのステージ」に入り、同世代の少女を通じて「フェミニティ」に直面せざるえなく」なり、「魔力を喪失させるほどの衝撃」を得たとの評価〔須川 2014〕は正鵠を射ていると思われる。ただし、その魔法は空飛ぶ宅配業を営む才能であり、仕事と同意義の関係にある。仕事に励めば「女性の幸せ」が得られるとする回路が崩壊したことは、必然的に「魔力を喪失させる」ことに繋がるのであり、「ほどの」という程度の問題ではないことは強調しておきたい。

さて、キキが自信を失ったことは、熱が下がり元気になったキキがオソノから届け物を頼まれた際、近いからとはいえ、歩いていくことを選び、ガールフレンドの猫と一緒だからとはいえ、ジジをお供につけなかったことからも窺える。つまり、これらのことは彼女が自ら意志で魔法を使おうとしなかったことを表している。彼女はどこかで自らの才能である魔法を否定し、それを使わず出かけること「空を飛ばない宅配業」で気分転換をはかろうとしていたのではないか。そのように解釈できる。ただし、ここではまだ空飛ぶ魔法は喪失していない。

この自信を失っていたキキをやさしい言葉で慰めてくれたのは、彼女が好意を抱く異性・トンボだった。そのことは、海岸で飛行船を眺めながら二人が交わした会話に表れている。

空を飛ぶことについて「私のは仕事だもん。楽しいことばかりじゃないわ」と悩みを吐露するキキに、「そうかな、才能を生かした仕事だろう？素敵だよ」とアドバイスするトンボ。そして、「ちょっと自信を失くしていたの。…トンボっていい人ね」と慰められるキキ。この二人の会話から、トンボが黒い服を着て仕事をするありのままのキキを認め、またキキもトンボの人格を受け入れたことがわかる。ここで初めてトンボはキキの恋愛対象として明確に浮上してくることになる。そして、キキはその恋愛対象の異性からの承認によって、仕事をする地味な自分でも必死に努めればご褒美として同年代の女性の持つ幸せ・好意を抱く異性とのパーティー(楽しいひと時)が待っているという回路を再び、そしてよりリアルに回復させることができたと思われる。

airiti

このような回路の回復が彼女の仕事とその才能である空飛ぶ魔法を肯定することになるからこそ、キキは同性のオソノには悩みを言いかけて止め、彼女が好意を抱く異性・トンボに悩みを打ち明けたのである。彼女の自信喪失を助けられるのは自分でもなく同性の先輩でもなく、恋愛対象となるトンボだけだったのだ。彼女は自力ではなく他力によって、しかも同性の人生の先輩ではなく、恋愛の対象となる異性からの承認によって、仕事へのモチベーションを維持してもらったのである。このように仕事の価値を恋愛に従属させる思考とこれを恋愛対象に承認されることが、果たして本当にキキの「成長」・「自律」・「自信」に繋がる〔須川 2014〕かといえば疑問を感じざるを得ない。

だが、その会話の直後にトンボが女友達のところへ行ってしまうことでその幸せの回路は一瞬にして切れてしまう。キキは彼の行為を自分への裏切りと感じたことだろう。彼女たちはキキが羨むパーティーにきれいな服を着ていける人々である。もうキキが仕事をしている限りそのようにはなれないと諦めてしまったものを持っている人々である。トンボが彼女たちのもとに向かった時、キキはやはり仕事をしていては、彼から選ばれることもなく、幸せにもなれないと改めて実感させられることになったのではないか。その回路が、依存する恋愛対象からの承認にあったからこそ、その異性の動向に過剰に敏感となり、彼の何気ない行為に裏切りを感じ、彼に強く嫉妬してしまったのであろう。

自分でも空飛ぶ魔法を否定しそうになっていたところに、さらに自分の価値を認めてくれると思っていた異性にも裏切りを感じ、キキは自分の生き方・考え方を強く否定されたように感じたに違いない。その異性からの承認への依存度が強かった分、キキは仕事をしても仕方ない、魔法なんていらないとどこかで絶望してしまったのではないか。だから、キキは魔法を失ったのだと考える。

まとめるなら、キキは仕事に励めば同年代の女性と同じような幸せ・好意を抱く異性とのパーティーへの参加が得られるという夢をどこかで描いていたが、自力ではその夢を叶えることができなかった。その後、その異性から仕事を認められることで再びその夢が叶えられそうになったが、それもその異性の裏切りとも思える行為によって一瞬にして潰えてしまった。その結果、仕事の才能である空飛ぶ魔法を失った、となろう。そこには、仕事の価

airiti

値を恋愛に従属させる思考性、仕事を恋愛対象の異性に承認されたいとする強い他者依存の志向性が見られた。

（二）空飛ぶ魔法が回復できた理由

次に空飛ぶ魔法が回復できた理由について検討しよう。キキの人生の半歩先を行く「分身」のようなウルスラとの会話は、キキに精神の充実をもたらし、自分の才能を信じることの大切さを知るよいきっかけになったといわれている〔石原 1997〕〔須川 2010〕〔大塚 2013〕。だがウルスラの述べたことは、やや達観に過ぎ、魔法の回復にはやや時間のかかるアドバイスだったように思われる。ウルスラとキキとの会話のやり取りからキキが受け止めたと思われる魔法回復のための処方について復元してみよう。

(キキ)「私、前は何も考えなくても飛べたの。でも今はどうやって飛べたかわからなくなっちゃった」。

(ウルスラ)「そういうときはジタバタするしかないよ。描いて描いてかきまくる」。

(キキ)「でもやっぱり飛べなかったら？」

(ウルスラ)「描くのをやめる。散歩したり、景色を見たり、昼寝したり、何もしない。その内に急に描きたくなるんだよ」。（後略）

(ウルスラ)「あたしさあ、キキくらいの時に絵描きになろうって決めたの。絵描くの楽しくてさ、寝るのが惜しいくらいだったんだよ。それがね、ある日全然描けなくなっちゃった。描いても描いても気に入らないの。それまでの絵は誰かの真似だってわかったんだよ。どこかで見たことがあるってね。自分の絵を描かなきゃって」。（後略）

(キキ)「私、魔法って何か考えたこともなかったの。修行なんて古い仕来りだって思ってた」。（後略）

以上、ウルスラとキキとの会話から復元できるところの、キキがウルスラから得た、失われた魔法を回復させ再び飛べるようになるための方法は、魔法や修行の意味について考え、ひたすら飛ぶことを試み、それでも飛べない時は飛びたいと再び思えるまで何もしない(無為)、というものであった。

これはまるで高僧や剣豪などがさらなる達人の境地に至るために、人に交わらず山などで己を磨き続ける修行のようである。そのような修行も、夏の

airiti

間とはいえ森の小屋に独り籠るウルスラのような人物ならば可能な感じがするが、魔女修行の地を海の見える人の多い都市に定めるキキのような者では難しいのではないか。しかもウルスラのように自分の才能が伸びなくて一人苦しむのではなく、才能を使って仕事をすることが女性の幸せに繋がらないという悩みでその才能を退化させたキキには至難と言わざるを得ない。

このように両者を比較するとき、ウルスラとキキは挫折したという共通点があるものの、似て非なるキャラクターのように見える。両登場人物の声優が同一人物(高山みなみ氏)であるのは、製作過程で生じた偶然といわれており、当初から予定されていたことではない〔叶 2006〕[15]。よって、自分の分身のような者から経験を聴き、「自分を信じることの大切さ」を学んだとする「ダブル・イメージング」〔須川 2010〕は過剰な表現と言わざるを得ない。ウルスラとの会話から得た「自分を信じることの大切さ」〔須川 2010〕とは現実のキキの悩みからは距離のある理想論であったと思われる。もちろんキキは自分を励ましてくれるウルスラに友情を感じていたであろうが、彼女の悩みは同性で生き様も異なるウルスラでは解決できないものであったと思われる。このことは、キキがオソノに何事かを言いかけて止めてしまったことと似る。もし、キキが悩みをオソノに打ち明けていれば、オソノもウルスラ同様親身になって話を聴き、真摯にアドバイスをしてくれたであろう。だが、それでもキキは救われない。これまで確認したように、彼女の悩みをなによりも解消してくれるのは、親しい同性たちではなく、好意を抱く異性からの承認だったのである。

さて、周知の通り、この映画で採られたキキの空飛ぶ魔法回復の方法は、クライマックスのシーンで飛行船に宙づりになったトンボを助けようとしてデッキブラシに乗る、というものであった。トンボへの愛が強くなることで魔法が回復するとの解釈〔上野 2013〕はその通りだと思われる。キキが自らも落ちて死ぬかもしれないような危険な救出劇に挑んだのは、ただトンボを助けたいという一心があったからに違いない。彼を助けたいという彼女の強い愛が彼女の才能を復活させたのである。助ける対象がトンボでなければ、ここまで必死になれる動機が彼女に持てたか、言い換えればこの物語のクライマックスを、説得力を以て描けたか疑問である。

この救出劇の結果、回復したのは空飛ぶ魔法だけではない。素気なかった

[15]叶精二「魔女の宅急便」(『宮崎駿全書』フィルムアート社、2006 年、P132-151)。

ジジもキキの傍に戻って来るのである。そしてこれらに伴い、仕事を頑張ればご褒美として女性の幸せを得られるという回路も再びキキの中で回復したと思われる。キキに助けられたトンボは、彼女の仕事の才能である魔法を以前にもまして称賛するであろうし、また彼女の命がけの愛に応えるために以前にもまして彼女との時を大切にするだろう(と思いたい)。少なくともキキに命を助けられたトンボにはそのように振る舞う義務がある。

ただし、ここで注目しておきたいのは、キキが空飛ぶ魔法を回復した後も、ジジと話すことができないままであるという点である。絵コンテ集のメモには「やっぱり言葉はもどらない。でもいいか…ほほえみ、ほおずりするキキ、ジジは完全な猫になる」とある〔宮崎 1989〕[16]。これはキキにとってジジというオス猫とのおしゃべりが、彼女の心の中で生み出した精神的に依存すべき親しい異性（異性の幼なじみ）とのそれを意味していたからであろう。

トンボと親しくなるまでの彼女の魔法の原動力は実は彼女と片時も離れなかったジジという「異性」の存在、特に彼とのコミュニケーションにおける彼からの承認にあったのかもしれない。トンボをボーイフレンドにしたキキには、もうそのような者は必要なくなり、それ故にキキは空飛ぶ魔法を回復してもジジと話せないままなのであろう。ただし、トンボとの関係が今後切れた場合、また話せるようになる可能性は残る。

さて、クライマックスの事件の後、キキの魔法はトンボとのコミュニケーションの中で、彼から認められる限りにおいて維持され、喜ばれると大きくなり、否定されると弱くなる、いわばトンボとの相関関係に置かれるようになると思われる。少なくともトンボがキキの魔法を否定することはないと思われるが、トンボのある行為が「浮気」などの裏切り行為としてキキに認定されれば、またキキの魔法は弱くなる可能性があろう。

おわりに

以上の検討から、宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』は、女子が自活をはかり、ついには男子を助けるガールヒーローの物語であるという反面、好意を抱く異性からの承認に仕事の価値を従属させる女性像を色濃く反映した物語でもあったことがわかる。これまでの研究には、その承認に「女性」としての「成長」・「自律」・「自信」が生まれるとする指摘〔須川 2014〕もある

[16]宮崎駿『ロマンアルバム特別編集 魔女の宅急便 絵コンテ集』徳間書店、1989 年。

が、本作に限って言えばそれには疑問を感じざるを得ない。たとえ「女性」であっても仕事の価値と恋愛のそれとは相互に独立したものであるべきではないか。

また、これまでの研究では、各世代の女性たちや周囲の人たちからの承認がヒロインの成長を促したことが指摘されてきた〔石原 1997、須川 2010、内田 2013、大塚 2013〕。だが、それは好意を抱く異性からの承認に比べれば間接的なものに過ぎず、キキというキャラクターに好感を持たせるための演出のように映る。

このような物語が八十年代に社会進出を果たしたとされる女性の悩みにどれほど応えられるものか疑問であるが、少なくとも同情できる内容であったことは確かだと思われる。ただし、物語の主人公は思春期に揺れる少女であるから、彼女が成長すればそのような女性像も彼女の中から見えなくなり、ウルスラのように一人森に住み、己を見つめなおす人物になれるかもしれないが。

『魔女の宅急便』は、仕事をする女性の抱える問題を、ハッピーエンドで見えなくさせることで、一層解決することが難しいものとして映る作品といえる。

なお、本研究は 104 學年度中國文化大學日本語文學系主催國際學術研討會にて発表した内容に基づいている。

参考文献

石原郁子（1997）「『魔女の宅急便』ここからあそこへのあいだの少女」『総特集 宮崎駿の世界 ユリイカ 8 月臨時増刊号』393 号、青土社

上野千鶴子（2013）「なぜキキは 13 歳なのか」スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋

内田樹（2013）「空を飛ぶ少女について」スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋

大塚英志（2013）「『魔女の宅急便』解題」スタジオジブリ・文春文庫『ジブリの教科書 5 魔女の宅急便』文藝春秋

おかだえみこ（1997）「宮崎アニメヒロインの系譜」『臨時増刊　宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブリ　キネマ旬報』1233 号、株式会社キネマ旬報社

airiti

叶精二（2006）「魔女の宅急便」『宮崎駿全書』フィルムアート社

切通理作（2008）「魔女の宅急便」『増補決定版宮崎駿の世界』筑摩書房

酒井信(2008)『最後の国民作家　宮崎駿』文藝春秋

スーザン・J・ネイピア（2002）「現実ばなれした存在の魅力」『現代日本のアニメ』中央公論社

須川亜紀子（2010）「ダブル・イメージングによる少女表象―宮崎駿『魔女の宅急便』―」白百合女子大学言語・文学研究『映画と文学』弘学社

須川亜紀子（2014）「宮崎駿の『魔女の宅急便』をめぐる旅―児童文学、アニメ、実写映画、そして『聖地巡礼』―」studio zero『宮崎駿の臨界点　サブカル・ポップマガジン まぐま 創刊 15 周年記念号』19 号、蒼天社

杉田俊介(2014)『宮崎駿論』NHK 出版

中川浩一（2012）「宮崎駿監督作品に見る戦う少女の系譜」倉敷芸術科学大学図書館『倉敷芸術科学大学紀要』17 号、学校法人加計学園倉敷芸術科学大学

宮崎駿（1989）「この作品では、一人の人間のいろいろな顔を見せたかった」『ロマンアルバム・エクストラ 70 魔女の宅急便』徳間書店

宮崎駿(1989)『ロマンアルバム特別編集 魔女の宅急便 絵コンテ集』徳間書店

宮崎駿（2002）「風の谷から湯屋まで 二〇〇一年十一月」『風の帰る場所』ロッキング・オン

村瀬ひろみ・須川亜紀子(2013)「ジェンダー論 アニメから読み解くジェンダー」小山昌宏・須川亜紀子編『アニメ学入門』現代書館

村瀬学(2015)『宮崎駿再考』平凡社

山田結樹（2013）「宮崎駿のヒロイン像―長編アニメーションをめぐって―」神戸学院大学人文学会『人間文化』32 号